

これらの敘述に際しエツケルトは彼が一九二五年に「Kartenwissenschaft」を公刊して後、新に現れた地圖類を概観し、何等かの意味に於て注目すべきものは悉く指摘して居るのであり、その博識と敘述の多面性とは依然として光彩を放つて居る。併し乍ら、その文章の激しい表現は地理學に縁遠い讀者を利目せしめるに足るであらうが、専門家の側からは異論を惹起する恐なしとしない。文獻の註記は全然省略せられて居り、多少呆氣ない感じでもあり、相當な資料も今少し纏め得る餘地もあつたらう。併し、全體を通じて言ふならば、敘述が比較的平易で理解しやすく記述の分量も手頃であり、その生涯を地圖學に捧げたこの老大家の最後の贈物として地圖に關心を有する者はもとより、他方面一般の讀者も啓蒙せらるべき所多大であらうと思はれる。(丸善報貳拾壹四)(三上正利)

大谷光瑞興亞計畫

大谷光瑞

『大谷光瑞興亞計畫』は全十巻のところ既刊六巻で、十五篇に分れ、支那の將來に於ける施設、支那治政の要諦、支那新首都と海港、錢塘江の水利、淮河の水利、海南島開設計畫、嶺南の水利、廣東及珠江三角洲の水利、揚子江の水利、黄河の水利並河北の水利、各省の水利、河江の航運、歐亞連絡鐵道計畫、近海航運港灣計畫、熱帶農業(既刊四章)等の内容を有し、最後の熱帶農業篇は未完なれども今後續刊の分を加へて、全四巻をこれに費される豫

定のもので、熱帯農業に對する著者の經驗と抱負と意氣とを窺ふに足り、蓋し全篇の壓巻と言ふべきか。特に南洋の氣候に就いて實際的なる立場より解説を施せる一章は、從來のかゝる種類の文獻の缺點を或る程度まで補ふものであり、著者の南洋濶著論に對しては双手を擧げて賛成とまでは行かざるも、通常一般の南洋觀を改めさせるに效能がある。我が國從來の北主南從主義を難じた一節は、短いながらも讀者の心を打つものがあり、『滿洲すら強て米作せしめん』とす。而も滿洲に於ても、奉天・熱河の如きや、米作に堪ゆる地方は移民を奨勵せず。北滿にのみ移民を集中し而も米作を求めんとす。我政府は農業に對しては極端なる天理に背反せる行動を國民に強制せり。この懲罰は今日の食料品缺乏を觀面に現出し、國を擧げ之に苦しまざるなく、世論は警々皆之を口にせざるなし。』とあるは、ジャバ、チスルバンに農園を經營する著者の敢て我が田に水を引く言とのみ、見逃すべきで無いと考へられ、農業専門家の間に東北北海道方面に於ける米作不適論が叫ばれる事のあるのと對照して、大いに考ふべき問題と思はれる。要するに『大谷光瑞興亞計畫』は、新しい計畫性、それも極めて實行可能と思はれる計畫性を多分に包含する、緻密な支那及南洋地誌と言ふべきで、此の方面に關心を有する。地理學徒の一讀に値すべき力作である。行文また大谷氏一流の極めて簡なれども要を得たる、讀者をして倦まざらしむるものがあるけれども、たゞ往々にして極めて難解なる字句を挿入する癖があつて、殊に序文の難解にして怪奇複雑なるは、初學者をして目を障らしむる、尙學癖

とも云ふべきか。但しかゝる字句に對しては卷末に註解(大谷氏のものに非ず)が有るのは親切と言ふべきである。(有光社版、各册分賣一回三十錢)(淺井得一)

筑前國嘉穂郡玉塚裝飾古墳

京都帝國大學考古學研究報告第十五册

北九州には古墳研究上に興味のある遺跡が多く、中で裝飾古墳の如きは早くから世に知られ、本考古學教室報告の第一、第三の兩册は共に是等を取扱ふたものである。今同じ報告の第十五册に『筑前國嘉穂郡玉塚裝飾古墳』が同じ裝飾古墳の一つを對象として原色版の模寫圖、寫眞等極めて豊富に、そのもの自體にふさはしき形をとつて世に表はれたことは故濱田教授の企圖を繼承する致室の事業の第一着手として誠に喜ばしいことである。

本墳は從來知られたる裝飾古墳と違つて新たに見出されたもので、引いて副葬品の全貌を知り得る點に特徴があり、而もその一が『筑後風土記』に見える筑紫國造磐井の墓に比定せらる可き岩戸山、石神山兩古墳と密接なる關係を有する點で甚だ貴重なる遺跡をなすものである。塚の外形は本來の主軸の長さ約二百六十尺に及ぶ前方後圓墳で、前方部正面の開きの大きく高い式に屬し、それが三段に築成せられ、周濠の存在を振擧げ得ると共に葦石、埴輪圓筒をも見受ける。其の後圓丘に存する石室は前後兩室よりなる横穴式で、主室の後半には石床があり、それを覆ふに石屋形の架橋を以てした複雑なものである。此の室乃至架橋の壁面には至

る所華麗なる裝飾を施し其の圖文又甚だ特色があつて、本墳の名を高からしめたものである。次に副葬品は鏡・刀劍・玉類・馬具・土器・挂甲等豊富であり、是等に就いて本書は適確な記載がありよく重要な點を述べ而も繁雜に墮ちない處此種報文として完璧の域に達したものと云ふことが出来る。壁畫に就きては之が見事な模寫圖を完成した小林助手が考察記述を懇當してゐて、赤黒き石面に印せられる黄色の珠文を夜空の星と感じ、連續三角形の構成に對して突込んだ視覚上の考察をなしてゐるのは此種の對象に對してふさはしい印象的直觀的な觀察と云ふべきであらう。

後論に於て本墳の特質を論ずるに當つて、廣く大陸との比較の上に立ち、又九州地方に於ける同種のものを探つて日本古墳系統上に於いて占める位置を尋ねてゐる、そこで本墳の示すところは前方後圓なる我國獨自の墳形のうちにも外來の内部構造を以てせる複合的な構造たるを推し、内部構造に關しては源流を遠く大陸に求めて、その系統をば漢代墓制の半島を經由したものとしたり、又壁畫に就いても高句麗・百濟の諸例と通ずる所あるも而も別個の特色顯かなるを述べ、之が例として彼の双脚輪狀文等の特殊なる圖文に對しては單に「マジカル」となす安易な解説の仕方を避けて之が意味の解明を將來に待つと共に、實體の明かな榊駒馬等に關しては九州に於ける石人石馬との關係を辿つてそれ等と裝飾の意義に於て同様なるべきを論じ、石人石馬がまた埴輪樹物と木質上相等しきものと見られることを述べ、此等は永久の住家たる奥城に於て外から來る余べてをプロテクトする意味があつたと解する